



ナビゲーション

ねん がつごう
(2021年3月号)

じりつ みち あん ない
自立への道案内



してんのうじだいがくきょうじゅ とりうみ な おみせんせい
四天王寺大学教授の鳥海 直美先生にインタビューさせていただきました。

もくじ

- シリーズ いろいろなテーマの「なぜ」を解消！
 とりうみ なおみ き きょういく ひつよう
 ～鳥海 直美さんに聞く インクルーシブ教育は、なぜ必要か～…………… 2
- シリーズ ～～Sevenメッセージ～～ えぬびーおーほうじん いしだよしのり
 せぶん と す
●住んでいるマンションのエレベーターが停まったら……………15
- 編集後記……………16

とりうみ な お み き きょういく ひつよう
 ～鳥海 直美さんに聞く インクルーシブ教育は、なぜ必要か～

＜プロフィール＞

とくてい ひ え い り かつ どう ほう じん り じ
特定非営利活動法人あるる **理事**

しゃかいふくしほうじん きょうかい ひょうぎいん
社会福祉法人あいえる協会 評議員

しゃかいふくしほうじんちいき かい ひょうぎいん
社会福祉法人地域ゆめの会 評議員

やました きょう うねが せんせい
山下：今日ではよろしくお願ひいたします。先生と
してんのうじだいがかく かくせい
は、四天王寺大学の学生さんが、ナビに
じっしゅう こ さい あ
実習に来られる際にお会いするぐらいで、
きょう はなし き で き
今日、お話を伺うことが出来るとい
うれ おも
うことで嬉しく思います。インクルーシブ
きょういく はなし おも
教育がテーマでお話していただきたいと思
してんのうじだいがかく かくせい
いますが、まず、四天王寺大学の学生さん
じっしゅう かえ こ しょうがいしや たい
が実習から帰って来られて、障害者に対
いしき か じっかん
する意識が変わったなと実感することは
ありますか？

がくせい すく しょくいん しゅうだんせいかつ さき
学生は、少ない職員が集団生活を支えて
ばめん み おお かん しせつ
いる場面を見て多くを感じ、施設ではいろ
しょうがい かがた しえん
んな障害のある方々を支援しているとい
にんしき がくせい かいめ
う認識をもつようです。その学生が 2回目
じっしゅう じりつせいかつ まな きかい
の実習で自立生活センターで学ぶ機会を
え ちいき く しょうがいしゃ で あ
得ると、地域で暮らす障害者と出会って、
と と
コミュニケーションを取ったり、泊まり
かい ご けいけん がくせい
介護も経験させていただきました。学生はど
ひと ちいき く じじつ
んな人でも地域で暮らせるという事実を
おどろ じっかん
驚きをもって実感するでしょう。そのこと
すく しんろ えいきょう おも
は、少なからず進路にも影響していると思
しょうがいしゃ ちいき く たざさ
われ、「障害者が地域で暮らすことに携わ
ひょうげん か
っていきたい」と表現するように変わって

いく^{がくせい}学生もいます。
やました じっさい しょうがいしゃ と
山下: 実際に障害者とコミュニケーションを取っ
たり介護^{かいご}に入るとい^{はい}う実践^{じっせん}をすることで、
しょうがいしゃ せいかつ じっかん
障害者の生活を実感してくれましたね。
とりうみ
鳥海: そうですね。施設や自立生活センターに私
で む じゅんかいし どう
が出向き、巡回指導もしています。
やました しせつ じゅんかい がくせい ようす ちゅうしん
山下: 施設を巡回して、学生の様子を中心に
み おも いま しせつ ようす
見ているとは思いますが、今の施設の様子
むかし しせつ ようす か
と昔の施設の様子と変わったところはあ
りますか？

とりうみ わたし おも で ほうもんさき
鳥海: 私もつらい思い出がありますが、訪問先の
しょうがいしゃ しせつ じっしゅうちゅう がくせい しせつ
障害者施設で実習中の学生から「施設が
つら りようしゃ へ や と
辛い。利用者さんがカギのある部屋に閉じ
こ ば つら
込められている。こういう場にいるのが辛
い。」という話を聞かせてもらったことが
あります。虐待ですよ。それを施設の
しよくいん つた で き
職員に伝えることが出来なかったのが
こうかい
後悔です。

やました い
山下: なかなか言えないですね。
とりうみ して き だいさんしゃ やくわり
鳥海: でも、それを指摘するのが第三者の役割だ
おも おお はんせい
と思いますので。大きな反省があります。

～自立生活のリアルさを感じた～

やました さき せんせい おも で
山下: 先ほど先生もつらい思い出があるとおっし
な
やっていましたが、何があったんですか？
とりうみ がくせいじだい しゃかいふくし まな
鳥海: 学生時代は、社会福祉を学んでいました。
なか じっしゅう いちばんさいしょ
その中で実習があります。一番最初に
じっしゅう い おおさか ほうせつ とくべつ
実習に行ったのは、大阪の北摂にある特別
ようごろうじん はんいち
養護老人ホームだったんですね。半日の
けんがく い おおべや
見学だったのですが、そこに行くと大部屋
こうれいしゃ かた にんいじょう なら
に高齢者の方が10人以上、ベッドを並べ
く うえ せいざ
暮らしておられる。ベッドの上で正座をさ
れて、窓をボーっと眺めている。何もそこ
かいわ ものおと
に会話もなければ物音もしない。まだ、

とうじ
当時はレクリエーションだとかリハビリ
テーションという概念^{がいねん}が老人ホームには
ねんだい お
なかったんです。それが80年代の終わりで
す。それはとてもショックでしたね。
やました ぼく しょうがいしゃ しせつ けんがく い
山下: 僕も障害者施設見学に行ったことがありま
こうれいしゃ しせつ おな じょうきよう
すか、高齢者施設も同じような状況なん
です。

とりうみ たけやぶ なか しせつ
鳥海: 竹藪の中にポツンとあった施設です。
こうれいしゃ かた にち
高齢者の方にプライバシーもなければ1日
に つか しよくじ うえ はこ
の日課もない。食事^{しょくじ}もベッドの上で運ばれ
てきたものを食べている。私はこういう
げんば はたら しゃかいふくし まな
現場で働きたかったのか、社会福祉を学ぶ
だんねん おも
ことを断念しようかと思うぐらいにショ
こうけい
ックな光景でした。

やました じもんじとう す
山下: 自問自答しながら過ごしていたわけですね。

とりうみ ゆうき も
鳥海: そういいながらも勇気が持てずダラダラ
がくせいせいかつ
学生生活にしがみついていたわけなんで
ねんご じっしゅう あさひく く やくしょ まな
すが、2年後の実習で旭区の区役所で学ぶ
きかい
機会がありました。

やました まな
山下: どんなことを学ばれましたか？

とりうみ りよう こうれいしゃ
鳥海: ホームヘルパーを利用されている高齢者や
しょうがいしゃ いえ どうこう はんいち
障害者の家に同行させてもらう半日の
じっしゅう じっしゅう わたし
実習だったんですが、その実習は私にと
じてんしゃ
ってはワクワクするものでした。自転車で
ちいき はし まわ たく ほうもん とき
地域を走り回ってお宅を訪問する。その時
わす しょうがい
忘れられないことがありました。障害をお
も ひとりぐ かた びょうき
持ちの一人暮らしの方です。病氣もわずら
っていました。アパートの2階に暮らされ
ていました。私は、緊張しながら、ヘル
パーさんの後をついて訪問に行かせても
らうわけなんです。

やました せんせい ほうもん とき しょうがいしゃ ほんのう
山下: 先生が訪問した時の障害者の反応はどうで
したか？

とりうみ た お ようき た
鳥海: 食べ終わったカップラーメンの容器、食べ
もの の もの から ふとん まわ
物や飲み物の空になったものが布団の周

りに並べられている。布団に本人さんが座
って、ヘルパーさんや実習生の私を待つ
てくれていたわけですね。そのアパートで
暮らされている本人さんの姿が、本当にい
きいきとされていたんです。自分のお城の
主として暮らしているかのように、とても
誇りに満ちて堂々としていて、最近の生活の
様子について話をしてくれました。こんな
風にして人は困りごとを抱えながらも様
々なサービスを利用しながら地域の中で
暮らすことができる。それを教科書ではな
くて、実際に障害当事者との出会いを通し
てリアルに理解したんですね。本当にとて
もいきいきとしていました。ありのままを
私たちに話してくれて、とても生活を楽し
まれていて、楽しまれている様子がこちら
にも伝わってくる。「これだ!」と。私が
思い描いていることは、施設での生活には
ない。地域で様々なサービスを利用しなが
ら自分で自分の生活を作っていく、この
生活のリアルさ、こういう生活に私は関わ
っていききたいなと、その時に鮮明に心に刻
み込まれました。21歳の時の実習でした。
80年代の終わりですね。

山下：半日でショックで受けたというのは相当
衝撃的やったと思うんですね。

鳥海：ここでどうやって 24時間365日を自分らし
く暮らしていくことができるんだろうか、
こういう生活を支えるという意味はなん
だろうかということを、考えさせられまし
た。自立生活をされている人の中で特に
印象的だったのが、実習中に会ったさ
きほの方です。本当にありのままにリア
ルに生活を営んでいらっしやる。その光景
ですね。やっぱり、出会った本人さんの力

だと思えますし、それから、地域での生活
が持つ強烈なリアルさと言いますか。こう
いう生活を支えるような仕事はなんだろ
うかと、その時にポジティブに考えられる
ようになりました。



施設訪問アドボカシーの報告会（東京，2018）

～いろんな立場の人が集まりました～

山下：自分も施設に入所していたことがあるので、
施設の話もすごく興味があるのですが、
話を教育に戻したいと思います。打ち合
わせの時に、障害のある学生を同じ年代の
人がサポートしてくれているという話で
したが、先生が学内で障害者と学生と一緒
に取り組んでこられたことを教えてください。

鳥海：大阪頸髄損傷者連絡会にボランティアとし
て関わったことをきっかけに立ち上げメ
ンバーと出会って、都島区の自立生活セン
ター・あるるの運営を後方支援させていた
だくことになった。2000年頃は放課後等デ
イサービスもなかった。障害のある子ども
の相談支援というのものない時代でした。そ
ういう時に、都島区に隣接する旭区で暮ら
す障害のある子どもとその家族にアンケ
ット調査をしたところ、放課後や週末は家に

閉じこもりがちな実態が明らかになった。
余暇を充実させたいが、外出するにも
家族だけでは大変だというニーズを聞か
せてもらいました。

山下：情報収集から始められたんですね。
鳥海：そこで、旭区で出会った仲間たちとともに
NPO法人の立ち上げに関わらせてもらっ
て、障害のある子どもの余暇支援をする
活動に取り組みました。その時から学生の
力を借りて長期休暇中や週末にレクリ
エーションのイベントを学生主体で企画
して、旭区の子供達に参加をしてもらい、
という活動を長く続けていました。

山下：企画や活動をしていて感じたことはありま
すか？

鳥海：親御さんの声は聞こえるんだけど、障害の
ある子どもの声が聞こえてこない。かき消
されてしまっていて、遊びをするのも子ど
もの意向なのか親御さんの意向なのかそ
こはとても曖昧でよくわからない。ならば、
地域で暮らしている障害児の意見表明権
を保障するような相談支援の在り方をモ
デル的につくってみようということに取
り組んだのが2007年ですね。本人の今まで
やってきたことや、これからやってみたい
ことを、支援者と子どもと家族だけが話し
合うのではなくて、障害のある子どもの
同級生、きょうだい、学校の先生、医療的
ケアの必要な子どもの場合は主治医にも
参加していただく。障害のある子どもが
地域で暮らし続けていくための“将来”と
いうのを思い描いていこう、その為にどん
な活動をしていけばいいのか、どんな人
と繋がっていけばいいのか、本人と一緒に
考えていく。実際に体験の幅を広げていく。

仕事体験をしてみる。そんな活動に取り組
んだのが旭区での活動です。



鈴木祐花さんと盲導犬のエナさんを囲んで(2018)

～同世代の人から伝えることが大事～

山下：いろんな人が集まって話す時に、本人も
意見を言えたりとか出来るんですか？

鳥海：やる前はどうなることやらと思ったんです
が、その会議に同級生の友達がいることに
よって、本人さんは緊張せずに取り組めた
ようでした。会議には遊びの要素も取り入
れました。当然、健常者の人数の方が多い
ですし、「こうあってほしい」という大人の
偏った意見に子どもが流されないように
必ずそこには、自立生活センターの当事者
の方に同席していただきました。会議の場
が子ども中心、本人主体、子どもの意見
表明権を擁護したものになっているかど
うか、モニタリングしていただく、という
役割を担っていただきました。

山下：障害当事者が参加することは良いことです
よね。説得力があると思います。

鳥海：会議に参加してくれた子どもは言葉で「自
分はこうしたい、ああしたい」と表現する
のは難しいんです。しかし、同席している
同級生の子供達「中学生にもなって

えいがかん い は
映画館行ったこともないのは恥ずかしい

んちゃうか。いっしょ い
一緒に行こうか」と言うと、

ほんにん おとな
本人さんがニコッとするわけですね。大人

が言うニコッとしなかったかもしれない。

い ともだち いっしょ い
けれども友達から「一緒に行くで」と

いう投げかけがあると、子どもの表情が

やわ ともだちどうし あそ やくそく
和らぐ。友達同士で遊ぶ約束ができる。と

でもワクワクする場だったなと思います。

やました よ めん おも けんじょうしゃ
山下：良い面もあると思うんですけど、健常者の

にんずう おお さいしょ ほんにん
人数が多いということで、最初は本人さん

のことを考えながらお話をしてると思う

んですけど、話が盛り上がってきたりする

と、どうしても健常者目線になるのかなと

思うんですけど、どうですか？

とりうみ こうこうしんがく ほんにん めいかく
鳥海：高校進学1つとっても、本人さんからは明確

に「高校に行きたい」と語られることはな

いんですね。ところが、そこに集っている

おとなたち ぜんいん こうこう まな
大人達というのは、全員が高校で学んだ

けいけん こうこう にゆうがく
経験があるので、高校に入学することを

ぜんてい ちゅうがくそつぎょうご はなし
前提で中学卒業後どうしようかという話

をする。そのことについては、ある当事者

かた してき う
の方から指摘を受けました。

やました い
山下：どんなことを言っておられましたか？

とりうみ かいぎ ほんにん い し
鳥海：この会議そのものが本人さんの意思によら

ず、高校に行くことが前提で話し合われて

いるのではないかな。ふとうこう こうこう しんがく
不登校や高校に進学し

ないという選択肢、それらについてなんら

ほんにん じょうほうていきょう
本人に情報提供されていないのではない

かという批判をいただきました。その時に、

どうせき どうきゅうせい はつげん かいぎ くうき
同席していた同級生の発言が会議の空気

を変えてくれました。「高校ぐらい卒業し

とときや。」と本人さんに言ったんです。大人

たち わら さそ
達もクスッと笑いを誘われました。こんな

ふうにともだちかんけい なか こうこうしんがく
ふうに友達関係の中で高校進学というの

が言葉でやり取りされて、そして本人さん

うなず こうこうしんがく
もそれに頷くのであれば、高校進学という

のもせんたく あ
選択として有りじゃないかなと。

しょうがっこう ちゅうがっこう やす がっこう だいす
小学校も中学校も休まない。学校が大好

きな ねんかん み もの こうこうしんがく
きな 9年間を見てきた者として、高校進学

というせんたく ほんにん
選択は本人さんらしいんじゃない

かなと、そのけつていだ どうきゅうせい ひとこと
かなと、その決定打が同級生の一言でした。

やました どうきゅうせい ちから おとな
山下：同級生の力ってすごいですね。大人では

で き おも しえんがっこう
出来ないことだと思えます。支援学校とい

うせんたくし
う選択肢はもともとなかったということ

ですか？

とりうみ ほんにん
鳥海：そうですね。ありませんでした。本人さん

しょうがっこう ちゅうがっこう ちい き がっこう
は小学校も中学校もずっと地域の学校で

まな つづ しょうがい
学び続けてきたので、障害があるというだ

けで、なぜまな ば わ
学びの場が分けられなければなら

ないのかという問題意識はそこに集つ

ているおとなたちぜんいん ゆう
大人達全員が有していたことなん

ですね。ですから、ほんにん しんろ かんが
ですから、本人さんの進路を考

えるかいぎ とき しえんがっこう せんたくし
る会議の時に支援学校という選択肢はな

かったですね。どうすればちい き まな
地域で学んでい

けるのか。ほんにん ちい き く つづ
けるのか。本人さんはこの地域で暮らし続

けてきたんだから、どうやってちい き まな
地域で学び

つづ かんが
続けていけるかを考えていましたね。



さわだけんた そつぎょう そつぎょうしき
澤田健太さん卒業おめでとう（卒業式、2016）

がくせい こえ
～学生からの声「ぜひ、やってみたい」～

やました せんせい しょうがい がくせい かか なか さいしょ
山下：先生が障害のある学生と関わる中で最初は

とまど おも
戸惑いもあったと思うんですがどうです

か？

とりうみ あさひく で あ さわだ けんた ねん
鳥海：旭区で出会った澤田健太さんが2012年から
してんのうじだいがく かもくりしゅうせい まな
四天王寺大学で科目履修生として学ぶこと
になりました。最初は、親御さんと毎日、
つうがく こま おやご
通学してました。これは困ったなと。親御さ
んは通学から授業中まで、昼食もトイレ
も一緒に居られるわけですね。これはど
うしたものか。親御さんもお疲れになって
くる。

やました さいしよ おやご き は がんば
山下：最初は親御さんも気が張ってるから頑張る
だろうけど、だんだんしんどくなってきました
よね。お互いに。誰かに相談はされたん
ですか？

とりうみ がくせい そうだん だいがく
鳥海：学生に相談してみたら、大学のボランティ
ア部の部長さんを紹介してくれました。
きょうしつ なま い ちゅうしょく た
「教室で学ぶ、トイレに行く、昼食を食
べるなど常時介護が必要な科目履修生が
いるんだけど、みんなと一緒に学ぶ場を
つく い
作れないだろうか。」と言ったら「ぜひや
ってみたい。」というふうに学生が言って
くれました。そこから通学そして授業中、
ちゅうしょく かえ ふくすう がくせい
昼食、帰るところまで、複数の学生がチ
ームを作って、澤田さんと一緒に過ごす、
そんな関係が作られることになりました。

やました り かい ぶ ひと よ
山下：理解のあるボランティア部の人で良かった
ですね。部の人たちは介護の資格とか持っ
ていたんですか？

とりうみ そうだん ぶちよう
鳥海：そうですね。相談した部長さんはガイドヘ
ルパーの資格を持っていて、アルバイトも
していたり、部活動の一環として障害児
しせつ ていきで き ほうもん こ たち いっしょ
施設に定期的に訪問して子ども達と一緒に
あそ だいがく しょうたい
に遊んだり、大学に招待したりしていまし
た。「澤田さんが学内で過ごすにあたって、
ふう こま いっしょ かんが
こんな風に困っているんだけど、一緒に考
えくれたら嬉しい」と言ったら、「僕がや

ってみたい、チャレンジしたい」と言って
くれて。

やました な
山下：それだったら慣れているんですね。

とりうみ ぶちよう さわだ
鳥海：もう1つ、部長さんからすると、澤田さん
は先輩だったんですけど、友達や先輩とし
て「面白いやつやな」というふうに思っ
ていたのだと思います。障害者として見るの
ではなくて、友達や先輩の一人として見て
いたと思うんですけど。

やました ぶちよう しょうがいしゃ きょうみ
山下：その部長さんも障害者に興味がなかったら、
しようと思わなかっただろうし。ガイドヘ
ルパーとか施設訪問してるから大学の中
で障害者が来ても大丈夫ということす
よね。

とりうみ しょうがい ひと どりょう
鳥海：障害のある人とかかわる土壌はあったとし
ても、澤田さんに関わり続けた根っこのと
ころには、「面白い先輩ができたな」とか
「一緒にいたら楽しいな」という、そんな
ところが大きかったと思う。実際に、二人
は喧嘩もよくしてました。それも素敵だな
と思うんですね。

やました どうねんだい で き どうねん
山下：同年代じゃないと出来ないですよ。同年
代だから言い合えることもあるだろうし。

とりうみ
鳥海：そうですね。1つエピソードがあります。
さわだ じゅぎょう しゅうちゅう とし
澤田さんが授業に集中しない時があっ
て「自分はこうして隣りで一緒に授業を聞
いてノートを書いているのに、澤田さんが
じゅぎょう しゅうちゅう
授業に集中しないのはおかしいじゃな
いか。だったら、僕はノート書かへんぞ。
じゅぎょう き ぼく べんきょう
授業をちゃんと聞かなあかん、僕の勉強
ちやうねんで。」とやりやってみましたね。

やました じ ぶん しゅう
山下：自分のことをしてるわけじゃないのに、集
中してなかったら、それは学生も怒ります
よね。そういうふうに言い合える関係って
良いですよ。

とりうみ 鳥海：そうですね。澤田さんは大学にいる時、いつも友達と一緒にいるので、そこに私や親御さんがひょっこり現われて、何か言うものなら「あっち行って。」と腕を押されます。「友達と一緒に楽しくやっているので、関係のない人はこの場から去ってください」という、思いを澤田さんが伝えてきます。それぐらい澤田さんにとっては、学生同士の時間は楽しかったんだろうな、安心できるのだろうなと思います。



澤田健太さんとゼミ生（ゼミ送別会，2014）

～他の学部にも広がっていった～

山下：障害者や学生ボランティアと関わって良かったことと課題を教えてください。

とりうみ 鳥海：良かったなと思うことは、周りの学生たちにもたらした影響の大きさ。これは本当に一緒に過ごしてくれた障害がある若者の力だと思います。学生が卒業後の進路を考えると、障害のある人が地域で暮らし続けることに自分も関わりたい、という選択をするなどの影響をもたらしました。現に卒業後も澤田さんと関わっている、支援者として関わっている者や、友達として関わっている者がいます。澤田さんの暮らしている地域の法人に就職する学生も

いました。

山下：障害者と深く関わっていくことで価値観や考え方が変わってきたということですかね。

とりうみ 鳥海：そうですね。澤田健太さんの卒業後、山根大知さんがバトンを引き継いで四天王寺大学で学ぶことになりました。入学当初は児童分野に関わりたと言っていたけれども、山根さんとの出会いを通して、卒業後に障害分野で仕事をしている学生

もいます。また、山根さんから「ヘルパーの資格を取ったら？」と勧められて多くの学生が資格を取りました。アルバイト先も山根さんから紹介してもらっていたようです。資格を取った学生の中には、学内での授業、通学、自宅での風呂の介助まで山根さんと一緒に過ごしている者もみられました。施設を解体して、どのような障害があっても地域で暮らし続ける社会を目指すときに、何よりも重要な支援はヘルパーではないかと学生時代からずっと考えています。

山下：学生がヘルパーの資格を取って、それをアルバイトにする。それを仕事にして、いつでも介護を必要とする人が地域で暮らすための人材が在学中に増えたのは私も嬉しいことですね。本人が声をかけたことも素晴らしい、それは本人さんの成果なのかなと思いました。

とりうみ 鳥海：7年間にわたって障害のある若者を科目履修生として受け入れ、学生ボランティアの組織化のお手伝いをしてきました。全学的な取り組みではなく、学生有志と教員によるインフォーマルな取り組みでしたが、少しずつ学内で知られるようにな

りました。その最大のメリットは、イン
フォーマルな取り組みでもできたのだから、
重度の障害のある学生を他の学部でも
正規に受け入れることができるかもしれない
という土壌が大学の中にできたこと
です。澤田健太さん、山根大知さん、そし
て、彼らと一緒に卒業した周りの学生が残
してくれた大きなお土産かなと思います。

山下：先生の思い、サポートする学生の思い、障
害のある学生を取り巻く支援者の考えが
一致しないとできないことだと思います。
逆に課題はどこにあると感じています
か？

鳥海：アメリカでは知的障害のある若者は、高校
卒業後に科目履修生として地域の大学の
授業を受けることができます。州によっ
て異なりますが、そのような仕組みが公的
な制度として保障されています。日本では
こうとうきょういく き かん だいがく せんもん がっこう
高等教育機関（大学や専門学校）への
進学率が8割を超えているのに、なぜ障
害のある若者だけが高校卒業後の学びの
機会が制約され、生活介護などに通って
世代の異なる人たちとの交流を強いられ
ないといけないのでしょうか。

山下：ちゅうぶでも、支援学校を卒業して、ちゅ
うぶの生活介護に通い始める方もいます。
それが悪いとは思いますが、もっと幅広
い選択肢があるということを広めていけ
たらいいですね。

鳥海：知的障害のある人は大学の入試制度からも
排除されています。障害のある若者が大学
で同世代の若者と関係を作り、同じ経験を
培い、卒業後もその地域の中で関係性を継
続しながら共に暮らしていく。その土台
になる大学生活というのは制度で保障さ

れるべきであり、これが課題だと思います。



やまねひろかず せい ぼうねんかい
山根大知さんとゼミ生（ゼミ忘年会，2018）

～一緒に失敗したりする経験をする事～

山下：最後に今回のテーマであるインクルーシブ
教育はなぜ必要だと思うか。というところ
お聞きしても良いですか？

鳥海：障害の有無に関わらず、「どんな人にも意思
がある」ということを子どもが経験的に
理解できるのが遊びの場だと思います。
一緒に遊んで、一緒に笑って、一緒に口惜

しがる。インクルーシブ教育というのは
一緒に学ぶ場でもあります。学校生活に
は一緒に遊ぶことも大きな要素として含
まれています。一緒に遊ぶ関係のなかで、
障害のあるなしに関わらず、相手に思いを
はせる想像力を培うことができると思う
んです。一緒に遊ぶ、という経験をもっと
信頼してもいいと思います。

鳥海：子ども時代というのは18年です。その後生
きていく人生の方が長いわけです。子ども
の頃に分けられることによって、共に生き
ていくための基礎体力のようなものが奪
われてしまう。大人になって生きていく
社会には、障害がある人も、障害のない人
もいる。そうであれば、やっぱり学校教育
の場でも障害のある人もない人もいなく

ちやいけない。それなくしては共に生きる
社会をかたちづくることは難しいのでは
ないかなと思います。

山下：今、おっしゃったことが、まさに共に生き
る社会のスタート地点なのかもしれませ
んね。

鳥海：いろんな人が生きている社会で生きていか
なくてはいけないわけですね。障害を持
つ子どもが大人になって生きていく社会
には、当然、健常者がいます。むしろ、健
常者の方が多い。そういう社会を生き抜か
なければならない。それは、健常者と言わ
れている私もそうであって、健常者だけ
の社会で生きるのではなくて、いろんな人
たちがいる社会の中で生きている。教育の
場で分けられてしまうと、障害者と健
常者が互いに出会わないまま 18歳まで育
ってしまうことになる。

山下：「出会ったこともない。」「コミュニケーシ
ョンをとったこともない人たちが」初めて
出会って、お互い偏見を持つことは自然な
ことだと思います。

鳥海：一緒に過ごす中で「なんやあ。こんな風に
笑うんか、わたしと一緒にやな。」という形で
お互いにわかりあっていく。その経験が子
どもの頃になれば、自分とは異なる他者
に偏見を持つことになりかねない。「あれ
は偏見だったんだ、ちょっと分かり合えた
ね。」という苦い経験もないまま大人にな
って、そこから共に生きる社会をつくって
いこうとするのは難しい。学校教育が
社会から分断されているような気がしま
す。

山下：0 から本当に畑を耕していかないといけ
ないと思いますね。

鳥海：むしろ、歳をとるにつれて、他者への偏見

も大きくなると仮定すればマイナスから
始めないといけない。イヤな経験も含めて、

もみくちやにされる経験も含めて、子ども
時代から共に生きる経験を培っていく、そ
の延長線上にしか、共に生きる社会とい

うのはないんじゃないかと思う。限りなく
連続しているものだと思います。そして、
やっぱり、自分とはまったく異なる多様な
人と、共に時間を過ごし、一緒に考えたり、
何かを成し遂げたり、一緒に失敗したりす
る経験をすることで、お互いに変わってい

けると思う。それは障害のある子どもだけ
ではなくて健常者もそう。周りの学生ボラ
ンティアが大きく変わっていくのを目の
当たりにしてきました。健常者の学生が
自分の今までの価値観をわきにおいて、新
しい価値観を培う。「いろんな人と一緒に
生きていくのがあたりまえ」という人間観
を培えるのがインクルーシブ教育かなと
思います。

山下：施設での経験がインクルーシブ教育に携

わる原点で、それを活かせていけたのが、
四天王寺大学での学生との出会いや関わ
りだったのではないかと感じました。

鳥海：ありがとうございました。

～～～Sevenメッセージ～～～

プロフィール

いしだ よしのり
石田 義典

えぬびーおーほうじん
NP0 法人ちゅうぶ 事務局 長（総務部 & グループホーム）、理事
37年または 43年（1984年ちゅうぶオープンから 37年。学生時代を入
れたら 43年）

しょうだいれんしっこういん
障大連執行委員



1、障害者運動に関わるきっかけ

・最初のきっかけは、大学1回生の時、学生寮の同じ部屋の友人が障害者の
介護に誘われ、「お前も一緒に行ってみるか？」と誘われただけ。友人は1回だけで辞めたが、なぜか面白
そうだと思って続けた。その障害者は脳性まひ者のグループ、青い芝の会に入っていて、文化住宅（ア
パート）で自立生活を始めてあまり時間が経っておらず、その日は好きなレコードを1時間以上かけて
ひたすら並び替えるのが最初の主な介護だった。

・特に問題意識があって介護に入っていたわけではなかった。ただ、もともと3つ上の兄が中学校に入
って精神的におかしくなり、高校受験前にいよいよしんどくなって高校入学後もうすぐに辞めてそのあと
は精神病院の入退院を繰り返したあとはずっと在宅。自分自身も中学生の頃から、家庭環境もなん
だかとてもしんどく、嫌で、大学で大阪に来た。違う世界を見てみたかったのだろうと後で思った。

2、障害者運動のやりがい、面白さ

・世の中の矛盾が分かりやすい形で現れること。
・関わったのはもう40年前になるが、ちょうど関西青い芝の会が解散する運動の激動期。何がなんだ
か分からない間にいろんな人が辞めていき、新たな動きが出てくる。グループゴリラという今では伝説
のグループに入っていたが、別に加入届があるわけでもなく、ただ毎週のように会議とひたすら介護は
あった。別に運動のために関わったわけではなく、「障害者福祉のため」なんてのもさらさなく。目
の前の障害者とどう関係を作るのか、毎日の生活をどう作るのかの模索の日々。一方、大阪全体では各
地区の拠点づくりが進められる中で、今の動きにいつのまにか繋がった。目の前の現実を少しずつ変
えていくことが世の中の大きな流れとつながっていく面白さがある。ちゅうぶでやっていることが大阪
や全国の動きにつながってきた。次の大きな激動期は2003年の支援費～2006年の自立支援法だが、こ
の動きの一つの中心は大阪、関西だったと思う。1万人を超える障害者、関係者が集まった日比谷公園
での集会と国会議事堂へのデモ行進で見た光景はやはり衝撃的だった。国会議事堂前でカメラを撮っ
ていたが、何時間いても途切れることのないデモ隊にはちょっと泣きそうだった。誰もが必死で、良い
意味で怒っていた。誰もが自らの意思で参加していた。

・面白さはいろいろあるが、結局は関わっている障害者が面白いってのが一番なのかもしれない。「面白い」という言い方は、実は関わって10年くらいは使わなかった言葉。当初はいわゆる青い芝・ゴリラの時代。差別する側、される側という概念が強かったし、ボランティアでありながら、ボランティアという世界とま逆。介護はお互いの関係性を見つめあう場という今では想像しにくい世界。職員を一般公募し始めていろんな人が関わるようになって、「〇〇さんって面白いよな〜」みたいな話が出始めた。トラブルや個性を良い意味で面白がる感覚は以前もあったが、言葉にすることはなかった。

・40年前、ちゅうぶの障害者にはまったく学校に行ったこともない人も何人かいた。社会経験なんてあるわけもない。言語障害もきつい。まちはバリアだらけ。なのに普通に居酒屋に入り、店の人とも話をし、電車にも乗り、まともに対応しようとしないうる駅員とケンカする。でも一方で活動はグダグダで、前には進まないことも多かった。講演会を用意しても、迎えに行ったら酒飲んでいて企画にならないなんてのも普通にあった。親以外の介護ではトイレができない人が中心でもあった。矛盾だらけ。それも面白さとも言える。

3、昔と今の比較：昔の障害者運動と今の障害者運動の違い

・昔と今の違いは時々話題にあがるが、良く言われるのは「昔の運動はすごかった、昔の障害者は自己主張が強かった。今は違う」確かに当時（40年〜50年前）の運動の中心にいた障害者のエネルギーはすごかったと思う。1984年設立当初のちゅうぶ（実はその前に10年以上の活動の積み重ねがあった）は一人暮らししているいわゆる自立障害者は2人で、あとの10名弱は在宅障害者で親が全面的に介護していた。全く学校に行ったこともなく、社会経験もほとんどなく、毎日ただ家にいるだけの障害者も多かった。でも彼、彼女らの「外に出る。何か主張する」エネルギーは強かった。それを支えていたのは長年抑圧されてきたことへの「怒り」、「障害からの解放ではなく、差別からの解放」、行動綱領に代表される青い芝思想なのだろうと思う。今でいえば医学モデルから社会モデルへの転換。難しい理屈は分からなくても、彼彼女らはなんだか自信と生きるエネルギーに満ちていた。

・ただ、「昔は良くて今はだめ」とはまったく思わない。2004年10月の台風の中でのデモ行進やその前後の毎月のようにやっていた厚労省前での集会、座り込み、デモ行進。大阪でも毎年、障大連の集会デモ行進には400名以上が集まっている。毎年やっているのに、大雨の時もあるのに良くこれだけ参加してるなあと思う。マイクアピールもみんな自分の言葉でしっかりしゃべっている。

・かつての運動は確かに「過激」だった、過激にならざるを得なかった。あの有名な川崎バス闘争にしても当時の運輸省は「車いすは折りたたんで乗る。介護者は複数用意する」で、労働組合や社会の理解も無かった。「ふざけるな！納得できるわけない！」と言わなければ突破できない状況だったと思う。あれから世の中は大きく変わった。それなりに制度は出来て理解者も増えた。当然、闘い方は変わる。でも大切なのは、障害当事者の立ち上がりやエネルギー。昔は凄かったかもしれないが、とても少数だったし、中身を理解していたのはさらに少数だった。今は理解を拡げながらの闘いだが、決してみんなのエネルギーが減っているとも思わない。相模原事件のようにいつ殺される側になるかもしれない。そのことを障害者運動は分かっている。もちろんどの団体も世代交代や運動のバトンをどうつなぐかは

大きな課題であることは間違いない。

・2018年、グループホーム入居者の小名さんが体調悪化でICUへ。気管切開し人工呼吸器を使うかどうかの選択を迫られた。医師は家族の意向に従う。本人は意識もうろう状態。この時、他の入居者や通所の障害者、スタッフが病院に押し掛け、本人の意思を尊重してほしいと訴え、本人にも話しかけ、結果途中で意識がはっきり戻り、今は呼吸器を使いながら充実した日々を過ごしている。家族以外の意見をちゃんと聞いてくれた病院もすごいが、この時のみんなの迫力、まっすぐな意見には圧倒された。



行政交渉で熱く思いを語る！

4、今、障害者に関わる中で、健常者（支援者）に求めるもの

・まずはあまり何も考えずに接すること。自分の経験からも〇〇考えるべきなどと偉そうなことは言えない。（実際には言ってるかも…） いろんな障害者、いろんな人生があり、すぐに判断したり、すぐにどうこうする方が危険。まずはいろいろ一緒に経験して、その中で考えていけば良いと思う。

・あえて言うとしたら、世の中の価値観を疑ってみる。私たちは、気づかないうちに多数者、マジョリティの側、強い側に立ってしまいがち。考えなくても特に困らない、がマジョリティ側とも言える。自分が何がしたいか、どう考えるか、ではなく、回りに合することが身についている。日本の教育は特にそういう面が強いように思うし、同調圧力も強い。40年前は「自己否定」。いったん自分の持っていた価値観などを否定してみる、違う考え方を取り入れてみる…がある意味流行っていたのかもしれないが、今は逆。芸能人の不倫にしても、なぜあそこまで自分と関係のない人の個人的な問題でバッシングし続けるのかがちょっと理解できない。みんなが「正義」を気づかないうちに振りかざしている気がする。

・もう一つ言うとしたら「地域の施設化」。入所施設ではなく、地域で在宅で生活しているが、実際にはヘルパーや福祉サービスの時間や制約の中で、それに合して生活していないか。スタッフがそれ知らない間に強制していないか、という視点。すでにある制度やルールに単に従ってしまうと、介護する側の判断や考えを強制していることになりかねない。ヘルパーやスタッフも労働者だから仕方がない面もあるが、「そもそも」を考えるべき。制度が充実すると知らないうちに障害者の生活や生き方を枠や型の中に押し込めてしまう面も出てくる。自分がもしその人だったらどうなのか、の視点がいると思う。

5、交通問題に取り組む時のこだわり

・外出は自立生活の第一歩→40年前はただひたすら車いすを押し、階段を担いでいた。階段や段差があろうが、どこでも行く！そういう障害者に自然にひきづられていたんだろうと思う。まちはバリアだらけだった。駅の階段を担ぐのは当初一般の市民。でも拒否されたことはほとんどなかった。バリアフリーになったから障害者が外出し始めたんじゃなく、外出し続けたからバリアフリーになった。

・いろいろな障害者と出会った。目の前にエレベーター付きの駅があるのに車いすでは電車に乘れないと思ひこんでいる人。50年生きてきて電車を見たこともない人。「自由な外出は自立の第一歩」だと思ひ知らされる。

・マニアックさと誰もが参加できることの両立→交通問題への取り組みは継続と「大衆化」が難しい。行政や交通事業者、専門家を動かすにはそれなりの知識も必要だが、粘り強さとみんなで取り組むことが重要。

・おにごっこは、趣味の活動？と時々言われる。否定はしないが、「まちのど真ん中でだれもが楽しめる」企画というこの裏で、実は徹底的にエレベーターや車いすトイレやバリアフリー状況を調べているつもり。当日は「楽しい」といろんな人が思ってくればそれで良い、にこだわっている。

・世の中かなりバリアフリーになってきた。でも肝心の一番楽しい場所に障害者が行けるのか。遊園地もジェットコースターなどには乗れず、車いす利用者は下で待っている「みんな楽しんでおいで！下で見てるからね…」は悲しい。アメリカではこれは「障害者差別」なのだと知った。発想の転換が必要なのだ。



こうつうじぎょうしゃしよくいんけんしゅう
交通事業者職員研修では
車いすの担ぎ方を教えます！

6、座右の銘

・「過去は変えられないが、解釈は変えられる」→高校生までは父を嫌っていたが、大学に入って、「父も犠牲者だったのかも」と思えた時に自分自身も少し軽くなった気がする。ちゅうぶでも昔から生活史を作っているが、自分なりに振り返ることが重要なんだと思う。

・「二度あることは三度ある」→何かトラブルや事故が起こった時、続いた時に、「もう嫌だ」ではなく、「悪いことはもう一回くらいあるはず」と予測しておく。もちろんそのための対策をすることが大切。

・「当たってくじけろ」→何かややこしいことが起った時は、あまり考えずに正面からぶつかると思ひ簡単に解決することが多い気がする。まあなかなかできないが…。

7、団体をまとめる時（活動する時）に大切にしていること

・そもそもまとめる力も大した意思もなくやってきたので書きにくいのだが、激動を乗り越えて何とか良くここまで続いてきたのはみんなの力だと思ふ。

・運動と事業のバランスを考える。怒りを正しく共有する。おもしろいことを共有する。やる気（主観）とやれる状況（客観性）の両方を大切に！

・7割の人がやる気になれるように！10割にはこだわらない。でも5割、6割だと厳しい。「やるべしと思ひええ、くじけずに主張し続けて賛同者を増やす。

・大切なことはみんなで話し合う。外部の意見も聞く。特に大きな失敗やトラブルがあった時に、何が問題でどう乗り越えるか。きちんと分析し、問題点は内緒にしない。

住んでいるマンションのエレベーターが 工事で停まったら

みなさんこんにちは。自立生活センター・ナビの山下（手動車いすユーザー）です。

私の住んでいるマンションがエレベーター工事のため、使用禁止になりました。（工事期間は2月22日（月）～3月5日（金））工事が始まると知ったのが、工事開始の2週間前！

そこで、エレベーター業者に問い合わせをしました。

「エレベーターを利用する時だけ動かすことはできませんか？」

→「そういうことは今回の工事ではできません。ホテルやウィークリーマンションに泊まるか親戚や友達の家に行ってもらわなければならないと思います。」

「ホテルやウィークリーマンションに泊まる時は、そちらで費用を出してもらえますか？」

→「出せません。」

こま
困った・・・。

結局、介護のコーディネーターとも相談し、いつも入ってもらっているヘルパーさんとちゅうぶの職員2人体制で車いすごと階段の昇降をしてもらうことにしました。マンションは9階建てで私の部屋は2階です。

写真のように階段を昇り降りするのは初めてです。今回みたいに工事中だったり、災害が起こった時などエレベーターが停まることもあると思います。そんな時、こういう移動の方法もあるんだと再確認できました。（階段を移動する時は、身体と車いすを別々で移動させてもらうという方法は経験ありますが。）エレベーターが当たり前に設置されるようになった社会で、めったに出来ない貴重な体験をさせてもらいました。

この問題は、障害者だけに限らず高層階に住んでいる方、高齢者、ベビーカーを押しているなど様々な方が困ることだと思います。

工事を行なうことは仕方がないですが、早めに（少なくとも1か月前）に告知をしたり、工事の期間を出来るだけ短くしたり、代替案を提案し必要であれば管理会社やエレベーター業者が補償するなど仕組みを作ってほしいと思いました。行政交渉の時に、実際に困ったことを伝えようと思います。



えぬびーおーほうじん

NPO法人ちゅうぶのフェイスブックからも閲覧できます。

ぜひご覧ください（動画もあります）。



えぬびーおーほうじん

NPO法人ちゅうぶホームページ

きゅーあーる

Q R コードから読み取ることが出来ます

へんしゅうこうき
編集後記

みなさん、こんにちは。今回のナビゲーションはいかがでしたか？鳥海先生に取材をさせていただいて感じたことは、学生時代に自立障害者と出会わなかったら今の鳥海先生は、いなかったんだろうなと。その時に出会った障害者が、今後、鳥海先生が障害者と関わるきっかけや、インクルーシブ教育に携わる原点だったのではないとお話を聞いて思いました。

無事にマンションのエレベーター工事が終わり、毎日、快適にエレベーターを利用しています。みなさんも「同じようなことがあって困った。」「こんな風に対応した（対応してくれた）」などあれば教えてください。よろしく願いいたします。（やました）

●各団体で企画しているものがあれば、当センターが発行している機関誌ナビゲーションに掲載して
 ませんか？ナビゲーションは 3月、7月、11月に発行しています。掲載する際、各企画のお問い合わせ
 は当センターではなく、直接、各団体をお願いいたします。当センターにお問い合わせいただきまし
 ても、お答えいたしかねますので、ご了承ください。

●みなさんからのご意見、ご感想をお待ちしております。記事に対するご感想、日ごろ感じておられる疑問、こんな情報を知ってるよなど、なんでも結構ですので下記の連絡先までお寄せいただければ幸いです。また、突然、取材にお伺いさせていただき、ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、その際には、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

A horizontal sequence of 20 symbols: 10 triangles and 10 inverted triangles alternating.

じりっせいかつ
自立生活センター・ナビとは…

☆私たちの考える「自立」は…

はたら かね かせ こと み かい ぜんぶじぶん で き こと じりつ
働いてお金を稼ぐことや身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でし
ょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えら
れないときには仲間をサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」
であり、色々な方法でお手伝いしていきたいと 考えています。

ち い き し ょ う が い し ゃ じ り つ ち ゃ ん な い た と かい ご
 ☆地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として、例えば「介護してく
 れる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そし
 て「自立したいけど自分には無理かな？」自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩
 みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や
 申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出か
 けたり仲間と一緒に料理を作ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる
 「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セ
 ミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

[illegible]

はっこう じりつせいかつ
発行 自立生活センター・ナビ でんわ 06 (6760) 2671

じゅうしょ おおさかしひがしすみよしくにしいまがわ
住所 〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8 ファックス 06 (6760) 2672